

# 日本の伝統的文化と芸能

10期国際・文化学部 B班



後列

笛木喜代子 竹内莞二 釜田典男 山口一郎 小俣麻里子 熊野八朗  
(リーダー) (サブリーダー)

前列

鈴木麻緒 堀ノ内貞子 佐藤千代子 渡邊登志子 鶴見博 鷺巣好美

右上写真

青木茂

# 目次

1. まえがき
  - (1) テーマの設定
  - (2) 主な活動
  
2. 日本の伝統的文化 (書道、陶芸、和服、茶道、箏曲、川柳、柔道、相撲、剣道、弓道)
  
3. 日本の伝統的芸能 (歌舞伎、能楽、狂言、文楽)
  
4. まとめ

## 1. まえがき

### (1) テーマの設定

私達は国際・文化学部として、学校の授業で世界の色々な国々の文化を勉強しました。それに授業では日本の文化

である茶道、着物、書道、絵画、陶芸、日本舞踊などに触れることが出来ました。

そして現代はグローバル社会と言われ、良くも悪くも外国の文化が私たちの身の回りに溢れております。実際に東松山市に生活する人の約2%は外国籍の方です。これからは益々国際交流が活発になると考えられます。

そこで私達は国際交流を積極的に実践しようと考えました。そのために、自分たちの基礎である日本の伝統的文化や芸能を知ることが必要であると考え、私達の課題研究のテーマを「日本の伝統的文化と芸能」に設定しました。

(2)主な活動

	活動内容
2月	① 19日(木) テーマの決定
3月	① 9日(金) 歌舞伎 国立劇場会場 45周年記念観劇 映像でたどる国立劇場 市川団十郎、坂東三津五郎特別座談会 ② 10日(土) 小鹿野歌舞伎観劇 ③ 18日(日) 東松山国際交流協会主催「ニュージージラント」で見たこと、聞いたこと」講演会に参加
4月	① 7日(土) ALTと交流のためお花見の実施
5月	① 19日(土) 秩父歌舞伎正和会定期公演会の観劇 ② 26日(土) ALTと交流のため官ノ倉山ハイキングの実施 ③ 28日(月) 東松山国際交流協会に全員で入会
6月	① 18日(月) 国立能楽堂に能・狂言の観劇 ② 23日(土) ALT,留学生と一緒に茶道講習会の実施 ③ 29日(金) 国立劇場に文楽若手会を観劇
7~9月	①7/3日 東京国立博物館見学(日本の刀剣展) ②9/6日 出前講座 多文化交際交流講座を受講 ③9/8日 国際交流協会食文化交流会(ベトナム料理)受講 ④9/29日 ALT、留学生と書道と梨狩を楽しむ会を実施



埼玉県にも秩父地方には農民歌舞伎が有ります。春祭り、秋祭りなどに地元の歌伎舞台で歌舞伎が演じられています。小鹿野町は歌舞伎の町として知られております。私たちは小鹿野の春祭りに歌舞伎の見学に行つて来ました。

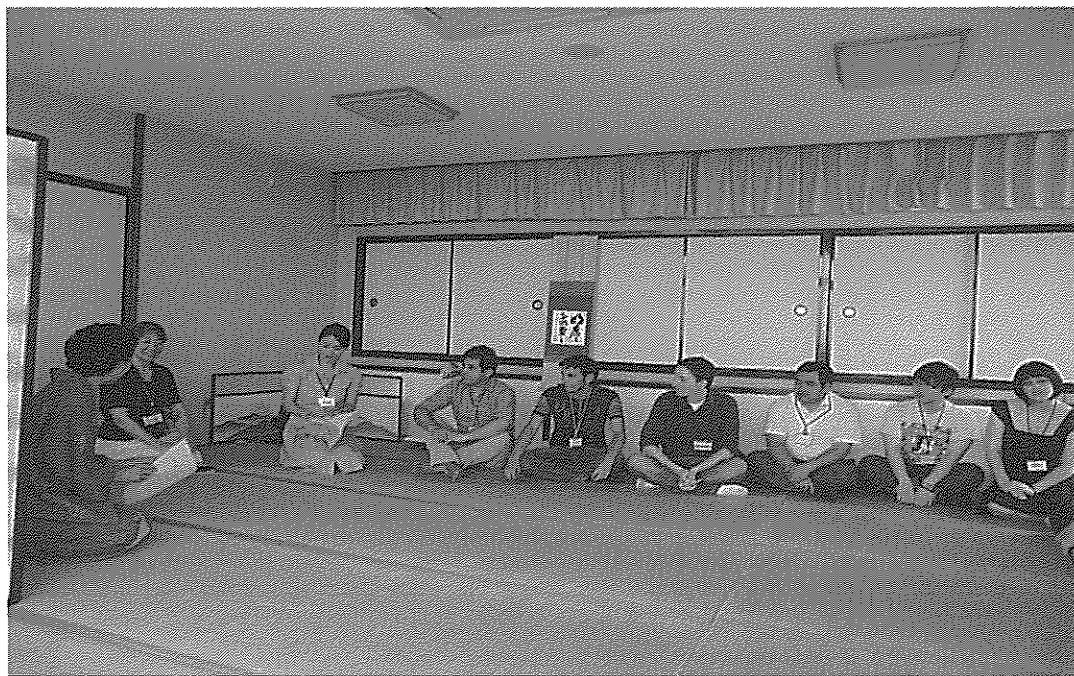


外国人の方々を招いての初めてのイベントお花見ランチパーティー。かまどで豚汁を作ったり、ご飯をたいたり。朝から総出で仕込みました





5月新緑の折に、ALTのオーストラリア人先生と一緒に小川町の標高350m程度の官ノ倉山に6名で行きました。行程の中で各々が片言の英語でコミュニケーションし、日豪の文化について多少の理解を得る良い機会となりました。



7人の外国人を招いて、裏千家・今井優峰先生のご指導の下、お点前を見ていただきました。私達部員は皆経験がなく、水屋での所作は一夜漬け。けれど、外国人の皆様には、茶道の心得を学んだり、日本の季のお菓子と共に神妙に一服、さらに、自分達でお茶を点て他の人に差し上げたり、もう一服と自分で点てて飲んだり、和気あいあいの茶道になりました。

## 2. 日本の伝統的文化

### 書道 Japanese Calligraphy

世界の国で文字を持たない国はない。しかし毛筆という機能の用具によって、美的表現をし続けてきたのは、中国、韓国、日本だけである。漢字は紀元前十数世紀から中国で用いられていたが、象形文字、指事文字から発達した表意文字である。

漢字は中国から朝鮮、日本へと伝えられてきたが、我が国は二千年ほど前に朝鮮半島を経由して伝えられたとしている。現在日本で使われている漢字は、篆書、隸書、楷書、行書、草書である。篆書は印鑑などに用いられている。

文字の伝来は日本人の文化、社会生活に画期的影響を与えた。文字記録により、文化、歴史の伝承が可能となった。古事記が稗田阿礼の暗唱を太安万呂が筆録したことによって書物となった。奈良時代、仏教が渡来し、写経が国家事業として行われた。この時代から、実用的なものから書の美の追求が強くなる。

平安時代に中国伝来の漢字を日本人の創意との合作で、音節文字であるひらがなを発明。これは、漢字の音を借りた一字一文の表記の音節文字である。ひらがなの発明は、日本文化の発達に決定的といえる大きな役割を果たした。ひらがなは、漢字の草書体をさらに簡略化した文字である。ひらがなは、当時の女性の間から広がり、世界最古の長編小説とされる源氏物語、更級日記などの日記文学、また、日本情緒あふれる和歌の世界は、ひらがなと共に開花した。

平安末期から鎌倉初期にかけて、禅宗の渡来は我が国の宗教界に大きな変革をもたらした。鎌倉から室町前期、禅僧の筆跡が墨跡として尊重され、煎茶の席上で迎えられるようになる。茶席の床飾りとして、千利休以来、多くの茶人たちに尊重された。

## 陶磁器 Ceramic Ware

日本の陶器の起源は、縄文・弥生時代の土器の名称で言われる古く原始時代に始まる。その後中国・朝鮮より優れた陶工・技術が渡来し、日本各地で独特のものを産出するようになった。

日本の焼物の歴史を振り返ると 12000 年前、縄文時代に日本人が初めて作った土器が起源とされている。

5 世紀に入って、朝鮮から釉がかかっている土器で炆器と呼ばれる物が伝わってきて、後の備前焼などに発展している。

飛鳥時代 7 世紀後半に、陶器として釉薬を使う三彩陶器が中国の唐三彩の影響下でスタートした。12 世紀平安時代に入って日本独特の成形法で庶民の世で発展をとげた。桃山時代に入って茶陶の中で美濃焼などで更に発展してゆく。1600 年代江戸時代に磁器が、朝鮮の陶工により醸成に成功し伊万里焼で創始された。文様は中国の景德鎮の古染付などに創意工夫が施され、合せて色絵技術も創始されて発展してきている。

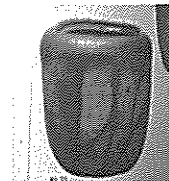
焼物を一般論の陶磁器とした見方では、陶器と磁器に技術的にはっきりとした違いで分類されている。

陶器は「土もの」といわれ、ガラス質を含まない粘土を素材とし、低い温度で焼くので多孔性で吸水性があり、余り硬くない。また肉厚で色は一般に茶系統の不透明色である。たたくと、にぶく低い音がする。「ろくろ」を回しながら手で作ったものは、表面が滑らかではなく形も不整形で温かみがある。

日本の芸術的・伝統的な陶器の有名なものには、

信楽焼、楽焼、萩焼、備前焼などがある。

信楽焼



他方磁器は「石もの」と呼ばれ、素材はガラスの光沢をもつ長石を含む石の粉で、高温で焼くため非常に硬く水を通さない。肉は一般に陶器より薄く、表面はガラスのように滑らかで、内部の色は半透明の乳白色で、たたくと澄んだ金属音がする。工業的に成形により形は整っていて、量産も可能で、日常生活で使われている大部分が磁器である。日本の磁器で伝統的に有名なものには有田焼、伊万里焼、九谷焼などがある。

西洋に磁器の製法が伝わったのは 18 世紀の初めで、日本、中国からである。当初ヨーロッパでは磁器は宝石並に高価で、王室では「磁器の間」などに飾られていた。今日世界的に有名なドイツの

マイセンなどの製品が東洋の磁器に似ているのはこのような歴史的背景による。

伊万里焼



## 和服(着物) kimono

着物は元来「着る物」という意味で、「衣服」を意味する言葉でした。明治時代に洋服を着るようになり、洋服と区別するため、和服と呼ぶようになりました。現在では世界の多くの国で日本で和服と呼んでいる物を **kimono** と呼んでいます。

九世紀末菅原道真の建議により遣唐使が中止され、大陸との公の交通が絶え、奈良時代の唐風一色からようやく、我が国の気候風土や四季の移り変わりによる、和風化の時代に入りました。この期の遺品は少なく資料文献から知るだけですが、

『源氏物語絵巻』に女房装束(俗にいう十二単)に見られる、「襲ね」は一枚、二枚と襲ねてゆき、その色彩のハーモニーで個性を創り、四季の移り変わりを表現しています。ただ美しいだけではなく、寒さを防ぐ重ね着は実用的でした。『信貴山縁起絵巻』では、下働きの女たちは、小袖一枚に腰布をつけただけの軽装です。重い十二単を着た貴族の女性ばかりが歴史の表面に浮き彫りにされていますが、実際には、一般庶民の間では小袖が着用されていたようです。庶民が着用していた小袖も、貴族や武士は肌着や防寒用の下着として取り入れていました。鎌倉時代に入ると、平安期の優雅さは影をひそめ、簡略化され、小袖を褌着として着るようになりました。室町時代には応仁の乱が10年も続き、平安朝貴族の実物資料は失われました。桃山から江戸時代は小袖が流行しました。小袖模様には金、銀糸を刺繍した繡箔のような絢爛豪華とは対照的な、辻が花染という絞染があります。一般庶民が愛用したものであり、上杉謙信、豊臣秀吉、徳川家康などの武将も小袖や胴服を愛用したと伝えられます。泰平の時代になり、商工階級が富裕化し、打掛という武家の奥方が着用した衣服が、豪商の妻も遊女も着るといった時代でした。

江戸後期はすでにあった「武家諸法度」やたびたび出される奢侈禁止令で、公家、武家、庶民を服装で区別し、髪型から化粧、言葉づかいまでが規定されていました。高い階層ほど派手で、低階層になるほど文様は小さく色彩も控えめでも「粹」で、身分相応の粋の中で流行をつくっていきました。そのような時代の中、友禅染という自由に絵を描くような技術が考案されました。

明治の文明開化によって洋装に移ってゆくと、着物は次第に日常着としての地位を失いました。正装の和服は着付けに手間がかかり、活動性に向け、夏場の気候には適さないなど、着る機会は少なくなっています。着物には、日本の文化と歴史が詰まっており、外国に引けを取らない日本の誇りです。



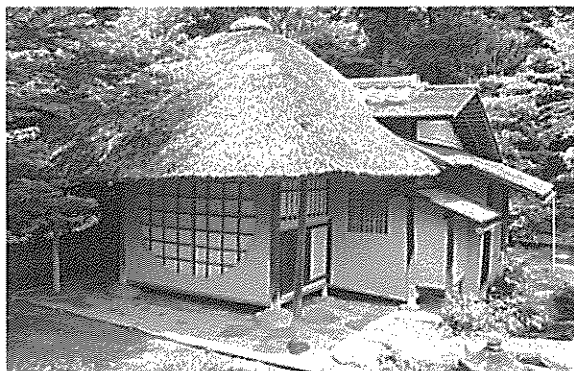


## 茶道 Japanese tea ceremony

茶道とは、広辞苑によると、一定の作法に従って主人と客が心の共感をもってお茶を飲む日本伝統のもので・・・とあります。

鎌倉時代に、中国から日本に禅宗を伝えた栄西や道元らによって抹茶が持ち込まれました。このただ飲むだけのお茶から、礼法・作法をもった茶の湯へ、そして禅宗の広まりとともに茶の道へと、独自の発展を遂げてきた日本伝統の文化が茶道です。

室町時代において、茶会は唐物数寄と呼ばれ、唐物を使用して盛大に催すことが大名の間で流行しました。しかし東山文化の中心、将軍足利義政の茶道師範であった村田珠光は、形式的な書院飾りの法式に侘びの感覚を取り入れたのです。亭主と客の精神交流を重視する侘び茶の茶会のあり方を説き、茶の道を成立させました。その後堺の町衆の千利休らによって、草庵茶道、



侘び茶道が完成されます。唐物偏重の時代に、茶の精神を要約した「和敬清寂」に込められた、目立たない調和のとれた美を追求しました。利休文化の特色でしょう。この後、利休七哲と呼ばれる弟子たち武士階級へと受け継がれていきます。侘び茶から発展した流派をなす大名も現れ、大名茶と呼ばれました。

江戸中期頃には、町人階級の間にも、茶の湯をたしなむ町衆が増加しました。この大量の門弟をまとめるために、元々、町方の出自である三千家を中心とする千家の流派が、家元制度を確立させました。三千家とは、表千家、裏千家、武者小路千家を指します。利休の娘婿である少庵から孫の宗旦へ、その宗旦の子達3人にそれぞれ受け継がれ、家元が誕生したのです。

明治時代になると、封建制度が崩壊し、各流派は諸藩の庇護を受けられなくなりました。しかし裏千家11代玄々斎宗室は京都博覧会において立礼式の茶席を設け、岡倉天心が茶道の儀式として Japanese tea ceremony と紹介し、海外にも知られる様になりました。13代円能斎鉄中は茶道再興に努め、財界人の関心を集め、これが女子の教養科目となっていきました。

現在千家とは別に、利休七哲、門人、宗旦四天王の流れをくむ派や、大名・武士たちの流れをくむ武家茶道等、茶道流派は数多くあります。しかしどの流派も、茶室での一期一会に、和 (harmony) 敬 (respect) 清 (purity) 寂 (tranquility) の4字に込められた利休の精神が連綿と引き継がれています。

## 箏曲 Koto music

『こと』は、箏・琴・和琴・等ありますが、ここで取り上げる日本の『こと』は、「箏」で、13本の弦で弾きます。

奈良時代に唐より伝わりました。当時は、当道制度といい盲目の方の楽器でしたが、楽曲は残っていません。

江戸初期に、盲目の音楽家、八橋<sup>やつはし</sup>検校が基礎を大成させました。

ちなみに、京都の銘菓の八つ橋は、八橋<sup>やつはし</sup>検校の八つ橋で箏の形をしています。

### 八橋流<sup>やつはし</sup>

八橋<sup>やつはし</sup>検校は三味線や胡弓の名手でもあり、「都節音階」を使い琴に応用しました。これが平調子であり、雲井調子に改めた平調子は琴の最も基本の調弦法とされています。作品には「琴組歌」と「段物」の二種あり、いずれも整然とした楽式構造をもつのが特徴です。

### 生田流<sup>いくた</sup>

八橋<sup>やつはし</sup>検校ののち、北嶋<sup>きたじま</sup>検校を経て元禄の頃に、京都の生田<sup>いくた</sup>検校によって箏曲は改変、整理されました。この他にも上方では新八橋流、藤池流なども生まれましたが、これらは大同小異でした。

### 山田流<sup>やまだ</sup>

上方で箏曲が早くから隆盛していたのに比べ、中期まで江戸ではあまり人気がなかったのか演奏する人が少なかったようです。総<sup>そう</sup>検校の安村<sup>やすむら</sup>検校は江戸への勢力拡大を図り、弟子の長谷富<sup>ながひ</sup>検校を江戸に送り、生田流系箏曲を広めさせたと言われます。山田<sup>やまだ</sup>検校斗養一は、江戸っ子好みの浄瑠璃を取り入れた新曲を作り、山田流箏曲を創始しました。

地歌と箏曲の一体化が進んでいくと、三種の楽器による合奏がよく行われ、三曲合奏になり、江戸時代後期には一段と発展しました。

吉沢<sup>よしかわ</sup>検校は「古今調子」と呼ばれる調弦法を考案し、「千鳥の曲」「春の曲」「夏の曲」「秋の曲」「冬の曲」を作曲しました。曲の歌詞などに古今集の若を多用し、復古主義と呼ばれました。

明治以降には、当道制度が廃止され、寺島<sup>てらじま</sup>花野の「新高砂」など多く作られました。箏曲は本来「組歌」という歌のみの楽曲形式による曲を最も正式なジャンルとしています。三本の右手指に爪をはめて奏でますが、三味線と合奏することにより「スクイ」という技法で、生田流、山田流の琴の爪はそれができるようになっています。「六段の調」「八段の調」「乱れ」「秋風の曲」「五段砧」などが代表的な曲です。

## 川柳 Senryu (seventeen-syllable poem)

おもしろくて、おかしくなければ川柳ではないと思っておりませんか、たしかに、笑いは川柳の一要素ですがそれが全てではありません。

川柳は、俳句と並び五・七・五（17音）の、リズムで詠む世界一短い詩の型です。

人情や人間の暮らし、人の世の出来事（親兄弟等の家族、学校、会社、戦争、地球、宇宙、政治、経済等）を題材にし、時には人の心の中までも詠みます。あなたが感じた喜びや、怒りや、哀しみ、楽しさを、17音で表現します。

川柳は五・七・五のリズムで人間をうたう詩です。ふだん私たちがしゃべったり書いたりしている言葉で、思ったこと、感じたことを自由に表現する詩です。

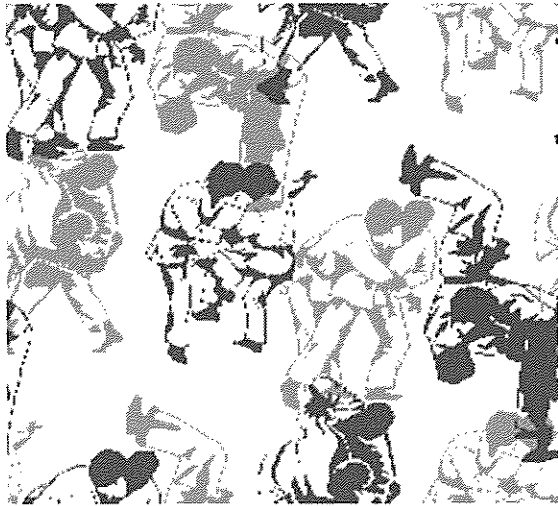
川柳では、ひとりひとりの暮らしや、いのちの喜び、楽しみ、悲しみ、怒りを詠むことができます。五・七・五さえ守ればあとは原則として自由ですから、俳句のような「切れ字」（何々や、何々かな）とか「季語」にとらわれることもありません。面白いたとえを用いたり、表面的な建前の奥に隠されている真実を描き出すことにより、読む人にユーモアや風刺を感じさせます。

川柳は、弱者の弱みをからかったり、言葉の表面だけの語呂合わせや駄洒落で人を笑わせるものではありません。ユーモアは、川柳の特徴の一つですが、それは上品なおかしみや温かみの感じられるところに本当の値打ちがあります。

一句 木枯や、跡で芽を吹け、川柳。



## 柔道 Judo



柔道は、12世紀以降の武家社会の中で武芸十八般と言われた武士の合戦時の技芸である武芸が成立し、戦国時代が終わって江戸時代に武術の一つとして柔術が発展した。明治維新以降、学習院講師になったばかりの嘉納治五郎が柔術を整理体系化し、修身法、練体法、勝負法としての修行面に加えて人間教育の手段であるとして柔道と名付け、明治15年(1882)東京府

下谷にある永昌寺の書院12畳を道場代わりとして「講道館」を創設した。

多くのスポーツは試合で勝利することが目的であるが、武道は戦場の格闘術や護身のための武術から発展したという歴史があるため、競技に勝つことが命題ではないと考えられていた。一方で柔道のオリンピック(1964)導入以降、競技が重要視されるようになった。

学校教育において明治期には武術は教育困難でかつ有害とされ、教授法改正により明治44年(1898)に旧制中学の課外授業に導入され必修の正課となった。

太平洋戦争の敗北後GHQにより学校での武道教授は禁止され、昭和25年(1950)新制中学校で解禁された。

国際的競技としての普及、柔道の試合競技は1932年のロサンゼルスオリンピックで公開競技として登場し、1964年の東京オリンピックで正式競技となる。女子種目も1988年ソウルオリンピックで公開競技、1992年バルセロナオリンピックで正式種目に採用された。現在は、国際柔道連盟の加入が199カ国、競技人口50万人以上と推定されている。

講道館柔道の技は「投技」「固技」「当身技」の3種類に分類される  
試合の技・・・「投技」講道館規定67種類(国際規定66種類)  
「固技」講道館規定・国際規定29種類  
「当身技」使用できない

段級位制・・・第二次世界大戦前に大日本武徳会が柔道・剣道・弓道に段級位制を採用。

## 大相撲 Sumo



日本相撲の歴史は古く、「古事記」の中で、建御名方神（たけみなかたのかみ）と建御雷神（たけみかづちのかみ）が出雲の国をかけた力くらべをして、建御雷神が勝ったという記述に起源とされる。また、「日本書紀」でも垂仁天皇の御前で日本一を争ったと記されている。

天覧相撲、時代が進むと相撲はいつしか闘いよりも豊作を願い神に奉納神事としてや、余興としてとられるようになった。「日本書紀」によると紀元前 642 年、皇極天皇が百済の使者をもてなす為に宮廷の兵士を招集して相撲をとらせたとある。

上覧相撲、戦国時代になると、戦国大名は武術としての相撲を奨励するようになり、織田信長も毎年大勢の相撲人（すまいびと）を集めては上覧相撲をとり行った。また、信長が勝者に与えた弓が弓取り式の始まりと伝えられる。このころ、力士は四股名を持つようになり「行司」も登場した。相撲が武術として大きく発展した時代であり、力士が武士（もののふ）である由来もここにある。

勧進相撲、江戸時代になると、寺社の建立や修復の為の寄付を集める為に庶民的な相撲が行われるようになった。この頃の土俵は人方屋と呼ばれ、見物人が輪を作ってそのなかで取り組みが行われた、「寄り」や「押し出し」はなかった、けが人や喧嘩が絶えなかった。

そこで、相撲浪人が組織された株仲間が興行主の取り締まりを強化し、土俵の改良を行う事になった、現在の年寄り株制度原型である。改良された土俵は人垣の変わりに俵を埋め、四隅には柱が建てられ、櫓が組み入れ、決まり手も 48 手が成文化され、スポーツとしての相撲が始まった。

大相撲、江戸時代後期に入り、今の日本相撲協会の前身にあたる江戸時代相撲会所が整備され相撲年寄りと相撲部屋も次々と誕生した、雷電や不知火が活躍した時代である。

昭和になると、土俵の危険な 4 本柱も撤廃され、戦前のラジオ中継、戦後のテレビ中継、平成になって世界に向けて衛星中継も始まった。



## 剣道 kendo (Japanese swordmanship)

日本における剣道の歴史は「古事記」712年にまで遡ります。古事記の十握剣（とつかのつるぎ）刀身が10つかみ程の長さの剣の伝説に記されているように、古事記には「太刀と弓矢」は武力の象徴でした。古墳時代（600年代）刀剣が大陸から朝鮮半島を経て伝来し、初期の刀剣は長大な平造りの

直刀で、武器としてよりも所持者の名誉、権力の象徴でした。武器として用いられるようになるにつれ、反りのある刀に変わっていき折れ曲がりせず軽くてよく切れる「日本刀」が出現し、源平時代には馬上から片手で振り回す技法が中心でした。鎌倉時代から室町時代にかけては、鉄砲の伝来により重装備の戦闘方式から軽装備の白兵戦へと変化しました。江戸幕府（1603～1867）の開府以後、剣術は特権階級の独占物となり「武士道」が生まれました。明治維新（1868）になり、武士階級は廃止され帯刀禁止令により剣術は下火になりました。

明治の富国強兵・軍国主義政策の影響で剣術は軍国精神の養成に利用されるようになりました。

大正8年には剣術は剣道に改称、第二次世界大戦での敗戦をきっかけに剣道は廃止されました。

昭和27年（1952）独立回復後、今日では学校体育の重要な部分を構成するとともに数百万人に及ぶ幅広い年齢層の愛好家が竹刀を持ち稽古に励んでいます。

世界各地で剣道を愛好する外国人も増え、平成15年（2003）7月にはイギリスのグラスゴーに於いて第12回世界剣道選手権大会が開催され、41の国・地域から選手が集まり、平成24年（2012）5月23日～5月28日にかけてイタリアの北部ミラノ市に近いノバラ市で第15回選手権大会が盛大に開催されました。



## 弓道 Japanese archery

昔から武芸十八般と言われていますが、その中でも今日親しまれている剣道、弓道の歩みを調べました。現在では日本に於ける伝統的な弓射文化を総称して「弓道」と呼称されており、「弓術」とは「弓道」へ改称する明治維新以前の日本古来の思想・技術を重んじた呼称であります。

### 起源（縄文時代～古墳時代）

弓矢の歴史は石器時代にまで遡ります。縄文時代草創期（13000～10000年前）には既に登場し、狩猟の道具として使用され、弥生時代に入ると狩猟生活から稲作へと人々の生活が変化、それに伴い土地や水源確保のため領地争いが盛んになり弓矢も武器として使用された。

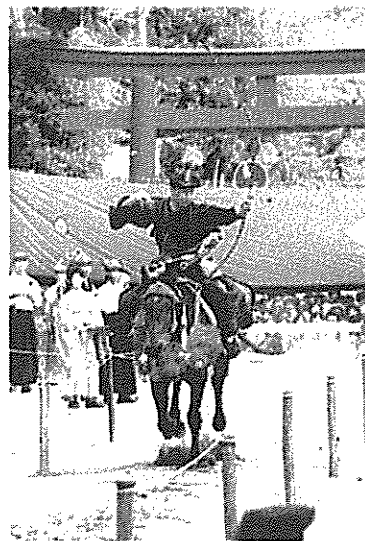
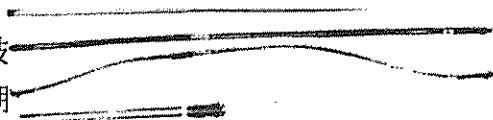
### 古代（飛鳥時代～平安時代初期）

飛鳥時代、「日本書紀」に馬上からの的を射る記述がありますが、神事としての原型も読み取れ、人々の間で弓矢には靈妙な力があると信じられ奉納、弓射神事が行われ、それを起源とした祭りや神事が今でも各地に残っている。

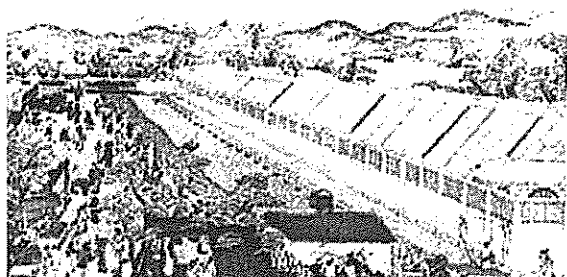
### 中世（平安時代～江戸時代）

平安時代武士が登場して以来弓術は武士の技として稽古も盛んに行われるなど、戦国中期までは戦場での主戦力でした。鎌倉時代には流鏑馬なども盛んに行われましたが、鉄砲の登場により戦国時代後期に「弓」が戦場の主戦力から後退する。然しながら依然「弓射」は武士の表芸とされ人気も高く泰平の江戸時代では各流派が競い合い京都三十三間堂・江戸三十三間堂の軒下を射通す「通し矢」が盛んに行われました。

明治維新後、幕府崩壊と共に武士階級の消滅、により弓術は衰退、明治28年愛好家有志により復活、大正8年には弓術は弓道へと改称、第二次世界大戦の敗戦により解散、弓道は戦後現代武道として復活します。



流鏑馬



### 3. 日本の伝統的芸能

#### 歌舞伎 Kabuki

豊臣秀吉（1536–98）の時代、派手な衣装を着て町を歩く人々が出現しました。常識にとらわれない彼らは、「常軌を逸した者」という意味を込めて「傾き者」と呼ばれました。

その風俗を踊りに取り込んだのが歌舞伎の祖とされる出雲（今の島根県）の阿国です。やがて阿国は男装し、「傾き者」の姿をして、茶屋女（茶屋で客の相手をする遊女）と客がたわむれる様子などを踊りで見せるようになりました。この阿国の「かぶき踊り」の名は慶長8（1603）年の文献に登場します。阿国の「かぶき踊り」は大流行しました。

そして遊女たちまでが真似をするようになり、「遊女歌舞伎」が発生しました。「遊女歌舞伎」では、遊女が出演し客を取る行為もあったため、徳川幕府は風紀を乱すとして寛永6（1629）年に禁止令を出しました。

代わって登場したのが、美少年が中心となって演ずる「若衆歌舞伎」です。ところが、この若衆歌舞伎も男色の対象となったため、承応元（1652）年に禁止されました。

その後に登場したのが大人の男性のみが演じる「野郎歌舞伎」で、これが今日の歌舞伎の源流となるものです。幕府は若衆歌舞伎のシンボルでもあった前髪を剃り落とすこと、歌や舞いよりも芝居を主体にすることなどを興行の条件として出しました。以降、歌舞伎は筋のある写実芸としての発展を遂げることになります。また、女性が舞台に立つのを禁じられたことで、男性が女性に扮する歌舞伎独特の「女方」の芸が生まれました。この「女方」は歌舞伎の大きな魅力の1つとなっています。政府の弾圧までもエネルギーに転嫁してしまうところに、歌舞伎の俳優と興行者のしたたかさ、その情熱がうかがえます。



## 能 Noh

古代、生命や生産の儀式として、巫女や神官が踊り、人々は手をたたき、歌を歌いました。

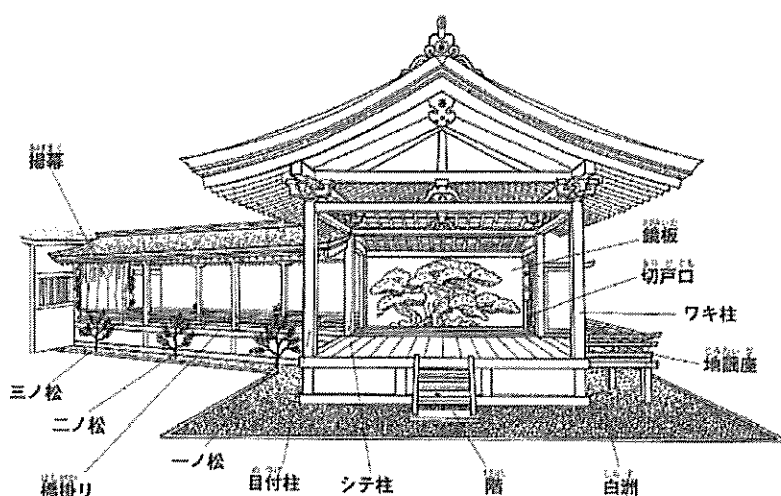
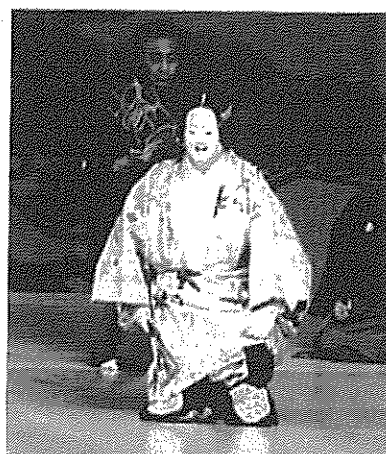
こうした全員参加の芸能が中世に入り、貴族が見物する娯楽へと変わります。

寺で行われた延年の舞という貴族のための舞樂が大流行、それと同時に田んぼの豊穡を祈る田樂、ものまねをとりいれた猿樂など、庶民的な娯楽も盛行します。

そしてその猿樂に美しい歌と踊りを取り入れ、優美さを加味したのが能樂です。

のちの観世流となる観阿弥は、京都で足利義満の庇護を受け、瞬く間に社会的地位を得ます。息子の世阿弥は観阿弥の能をさらに洗練させ、「高砂」

「敦盛」「班女」など傑作を次々と生み出しました。



能は、「謡」と呼ばれる語り、「仕舞」と呼ばれる舞い、そして「囃し」と呼ばれる演奏が一体となってひとつの世界を作り出します。

ストーリーは「人探し」や「決闘」など、事件を時系列に描く「現在能」と、亡霊や草木の霊が人間の姿を借りて現れる「夢幻能」があります。

世阿弥は理論家でもあり、彼の書いた「風姿花伝」は能の理論書としてだけでなく、すぐれた演劇書として今でも読み継がれています。

「秘すれば花なり」という言葉は有名ですが、能や役者の美を「花」に例え、「芸は秘めているからこそ美しい。芸を習得するための方法や奥義は、秘伝せよ」と述べています。

能は限られた美の象徴の世界で、大衆性や娯楽性を欠いていると言われますが、今もなお生き残っているのは、娯楽が口移しで伝承されていた時代の、この偉大な理論書のおかげでもあり、内面の激しさを一切外には出さず、最小限の動きと様式を重んじる能が、日本人の美に対する価値観を表しているからではないでしょうか。

## 狂言 kyogen

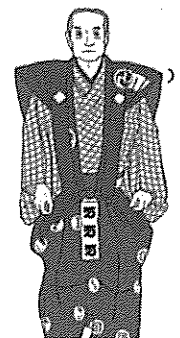
・狂言も能と同様に「猿楽」<sup>さるらく</sup>の中に含まれ、明治になるまでは、「猿楽の狂言」と呼ばれていた。明治に入り、「猿楽」は「能」と呼ばれるようになります。一方の狂言は、歌舞伎の作品のことも「狂言」といったので、区別をつけるために「能狂言」と称された。現在は「狂言」といえば、歌舞伎ではなく、この「能狂言」を指すのが一般的です。能も元は滑稽な演技から出発したもので、狂言も同じ「猿楽」から発生し、室町時代に共に発展した。織田信長、豊臣秀吉は能同様に狂言も保護し、江戸時代になると狂言方はワキ方<sup>はやしかた</sup>、囃子方と共に能のシテ方の支配下に組み込まれます。

・狂言には、大蔵流、鶯流の二流派が幕府のお抱え狂言師として江戸で活躍し、和泉流は朝廷や尾張藩、紀州藩のお抱え狂言師として、勢力を延ばした。明治維新で、江戸幕府が滅びると、能・狂言は突然権力者の保護から離れることとなります。鶯流が衰え、大正時代に滅んでしまったのもそうした状況の一つの現れです。能は国を代表する演劇として早くに評価されるようになりましたが、「喜劇」である狂言は軍事国家にあっては一段低くみられた。そんな中で狂言師は地道な活動を続け、普及につとめた。

・明治維新の時点で、狂言には大蔵<sup>おさくら</sup>・鶯<sup>うい</sup>・和泉の三流があり、それぞれ家元がいた。現在あるのは大蔵流と和泉流の二流です。大蔵流は宗家が明治時代に絶え、現在は東京の山本家と関西の茂山家<sup>しげやま</sup>の二派が力を持っている。和泉流は大正時代に宗家が絶えたが、弟子筋の三宅<sup>とうくらう</sup>藤九郎家の流れを汲む野村万蔵家から三宅家に養子が入り、そこから和泉家を継承している。

・狂言の主演となるのは、能と異なり、たいていが庶民階級です。大名であっても、一国一城の主というよりは、地主程度に考えた方がいいような親しみの持てる人物がほとんどです。

・よく登場するのが太郎冠者です。太郎冠者は主人に使える家来です。  
大名からある命令を下された太郎冠者が、失敗したり、怠けたりすることによって生じる滑稽な騒動が主題となる狂言はたくさんあります。  
代表作に「柿山伏」<sup>かきやまぶし</sup>「附子」<sup>ぶす</sup>があります。



太郎冠者



## 文楽 Bunraku

日本には古来から英雄の物語を語って聞かせる「語り物」という芸能がありました。その語り物の1つとして、おそらく室町時代（1333-1573）の末に生まれたと思われる物語が、源義経の若き日である牛若丸と浄瑠璃姫の恋を題材にした「浄瑠璃物語」でした。この「浄瑠璃物語」が大流行した結果、節をつけて語るもの全体が「浄瑠璃」と言われるようになってしまいました。その後、浄瑠璃は、中国から渡ったと言われる三味線を伴奏楽器として取り入れて発展し、さらに、「人形操り」とも結びつきました。「人形操り」とは、文字どおり、人形を操る見世物で、日本ではすでに平安時代ごろから、各地を回り、道端で客を集め、人形を舞わせて金をもらうくぐつしと呼ばれる大道芸人がいました。当初はごく単純な動きだけをしていた人形も、時代を追うにしたがって仕掛けも進歩し、複雑な動作をするようになりました。この人形操りと浄瑠璃との結びつきによって、江戸時代には人形浄瑠璃が完成されていったのです。

文楽は江戸時代に誕生した人形劇です。一般に「文楽」と言われるようになったのは明治以降のことで、昔は「人形浄瑠璃」と言われていました。三味線の伴奏に乗せて「太夫」という語り手が物語を語りそれに合わせて舞台の上で人形遣いが人形を動かします。3者は一体です。人形の動きは繊細で、時には人間以上に美しく、豪快に、悲しく物語を織り成して行きます。三味線の音色は体の芯に訴えるように、重く、美しいものです。語り、三味線、人形—この3者が数百年の長きに亘り、それぞれの分野で工夫を加えた結果、文楽は世界でも指折りの高い芸術性を持つ人形劇に成長しました。文楽の語りを「義太夫節」と言い、昭和の初期までは、これを趣味とする人がたくさんいました。有名な一節はほとんどの人が暗記しているほどでした。文楽のために書かれた作品の多くは歌舞伎にも取り入れられ、俳優のセリフや動きにも影響を与えました。



#### 4. まとめ

私達は今後ますます身近な国際交流が必要になると考え、積極的に国際交流に取り組むため自分たちの文化、芸能について考えました。

国際交流が求められる理由として

- ① 少子高齢化
  - ② グローバリズムの進行
  - ③ 外国人登録者の増加
  - ④ 外国人の定住化
- などが考えられます。

そこで私たちの社会でも地域社会維持のために、外国人との身近な国際交流が求められると思います。

ただ外国人が私達と一緒に生活していくためには、外国人が抱える次のような壁があるとします。

- ① ことばの壁
- ② 制度の壁
- ③ こころの壁

などが考えられます。

そこで私たちは身近な国際交流の一步として

- ① 挨拶をする。
- ② 外国の文化、習慣を知る。
- ③ 地域のイベントに誘う。
- ④ 国際交流協会の活動に参加する。

今後、以上のような内容を実践し一人一人が地域の代表という気持ちを持ち、身近な国際交流を進めていきたい。

この課題研究を通して自分たちの文化、芸能を再認識し身近な国際交流の一助になったと思います。